

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32610

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00428

研究課題名(和文) 党派抗争により分化する英国・初期印刷刊本の年代記の記述に関する研究

研究課題名(英文) Narratives of Scotland in printed and pre-print English Chronicles

研究代表者

高木 眞佐子 (Takagi, Masako)

杏林大学・外国語学部・教授

研究者番号：60348620

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：ジョン・オブ・フォードンのChronica Gentis Scotorumはジョン・ハーディングの年代記の記述に影響を及ぼした可能性が高い。ランカスターとヨークの抗争を契機として、ハーディングの記述と、キャクストンによる『イングランド年代記』(1480)の間には、英雄カドワラダの記述に関する対応関係がみられることが分かった。つまりハーディングの年代記はスコットランドの影響を受けつつ15世紀後半イングランドの年代記形成に大きく影響を及ぼしていたといえる。党派抗争によって分化したイングランドの年代記がヨーク派よりに傾斜した背景に、ハーディングの年代記があると明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヨーク朝成立前夜にできたジョン・ハーディングの年代記の影響が『イングランド年代記』の前身Prose Brutに及んでいる可能性は、ハーディングがランカスターとヨークの党派抗争の本質をいち早く見抜いていた証左ともいえる。15世紀後半に激化していく、二つの王家の正統性を主張するプロパガンダの中核にハーディングを据える見方はこれまでもあり、本研究もまたそうした流れの中に位置づけられよう。Chronica Gentis Scotorumや『イングランド年代記』との影響関係を具体例とともに明らかにした点は、特に学術的に意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：John of Fordun's Chronica Gentis Scotorum seems to have had an effect on Hardyng's narrative of the genealogy of English kings.

When the Wars of Roses broke out in the 1450s, the narrative of Hardyng's Chronicle 1st version makes a stark contrast against his second version, particularly in the part of the "Lamentation" after the story of Cadwaladr. The close association of Cadwaladr with York seems to echo in the Prose Brut text, which William Caxton published as the Chronicles of England in 1480. This seems due to Hardyng's Chronicle. Many English chronicles emphasized Cadwaladr during the Yorkist reign, and Hardyng's Chronicle seems to be one of the first of such tendencies.

研究分野：中世英文学 年代記 十五世紀

キーワード：John Hardyng Chronicles of England Chronica Gentis Scotorum

1. 研究開始当初の背景

- (1) **【校訂版の少なさ】**ハーディングの年代記の校訂版は、19世紀 Ellis によるハーディング第2版が現在使うことのできる唯一の版である。2015年に Simpson と Peverley が第1版の校訂版を出したものの、続編の出版は停滞している。ジョン・オブ・フォードンによる *Chronica gentis Scotorum* の校訂版は Skene による 1871、1872年のものである。キャクストン版『イングランド年代記』に校訂版はなく、Brie による20世紀初頭の EETS 版が唯一である。
- (2) **【ハーディング研究】**ハーディングの包括的な人物研究は20世紀初頭までのものに多くを負っている。近年のハーディングの人物研究には興味深いものも多くみられるが、上述の校訂版の問題もあり、やや散発的である。
- (3) **【複数の年代記比較】**ハーディングを含む三種の異なる年代記を比較検討する研究アイデアは、新機軸といえる。立案に当たっては、校訂版の問題に加えて韻文のハーディングの年代記と散文の『イングランド年代記』をどう比べるべきかが検討事項となった。*Chronica gentis Scotorum* は年代記の検討から始めた。

2. 研究の目的

- (1) **【年代記分化のプロセス】**本研究の第1の目的は15世紀後半の英国において、年代記のテキストはどのようなプロセスを経て分化していったのかを明らかにすることである。ハーディングの年代記にも中世のベストセラーと言われた *Prose Brut* (『イングランド年代記』の前身) にもそれぞれ分化の傾向がみられるからである。
- (2) **【ハーディングの人物像】**第1の目的の研究に先立って、ジョン・ハーディングの人物像についての研究が不可欠だと考えた。15世紀イングランドの政治にハーディングがどの程度の影響を与えたのかを推し量るためである。ゆえにこれを第2の目的とした。
- (3) **【年代記相互の影響関係】**ハーディングの年代記は果たしてスコットランドとイングランドの年代記の記述に影響を与えたのか。与えたとすればどのような影響関係だったのか、またどのような理由があったのか。党派的な分化に加えて、年代記相互の影響関係がみられるかどうかを、本研究の第3の目的とした。

3. 研究の方法

- (1) ハーディングの年代記については校訂版での比較が難しかったため、Ellis 版の他は初期印刷本や大英図書館所蔵の写本マイクロフィルム等を参照した。キャクストン版『イングランド年代記』は EETS と EEBO を適宜利用した。*Chronica gentis Scotorum* は Skene 版を使用した。
- (2) 2018年以降の研究成果を参照し、結果を適宜取り入れた。
- (3) Oxford Bodleian 図書館にてハーディング第2版の写本とその他の書写記録を閲覧し、ハーディングについての理解を深めた。
- (4) EBS の学会においてセバスチャン・ソベツキ、マーガレット・コノリー、マーサ・ドライバーらの知遇を得て、オックスフォード、マートン・カレッジのハーディング研究者ローナ・ハトソンを紹介していただいた。学会後別途面会をし、エリザベス朝期におけるハーディングの年代記の影響について新たな知見を得ることができた。
- (5) 慶應義塾大学名誉教授高宮利行より、ジョン・ディーによるジョン・ハーディングの年代記の利用について、貴重な知見を得ることができた。
- (6) 立案当初は歴史的事件の描写についての研究を検討したが、人物像の研究の方が分かりやすいことから伝説的人物の描写を具体的に検討した。(A) エドワード懺悔王 (B) カドワラダ (C) アーサー王の順番に研究を進めた。

4. 研究成果

【年代記分化のプロセス】

- (1) *Prose Brut* の分化
キャクストン版の印刷用原稿となった Huntington HM 136 写本は、リスター・マセソンの分類研究によれば比較的特殊なテキストである。本研究はこの点に着目して、キャクストン版にヨーク党派的に分化した傾向を読み込んだ。HM136 写本は、ブリテンの英雄カドワラダがブリテン島に帰れない逸話が挿入されているテキストで、この逸話は伝統的な *Prose Brut* にはみられなかった。カドワラダの記述がいつ頃からみられるようになったのか定説はないが、エドワード4世に献呈されていることからヨーク党派的な言辞としてカドワラダが登場したことは容易に想像できる。ここから、マセソンの分類研究における *Prose Brut* 写本群におけるカドワラダ譚の有無は、ヨーク派か、ランカスター派かの党派傾向を映し出している可能性があることを明らかにした。
- (2) ハーディングの年代記の分化
ランカスターのヘンリー6世に第1版の年代記を献呈した数年後、ハーディングはこれを改変しヨークよりの言辞を持つ第2版に書き換えた。ヨークの王位継承権においては母系アン・モアティマーの血統が大問題となり、ハーディングは *female inheritance* と *male contractual*

agreement を組み合わせてその正統性を主張している。これは、当時大量に出回っていたヨーク公の王位継承権を主張する言説へのハーディングの反応とみることができる。また、第 1 版でカドワラダ譚の終わりに書いていた“Lamentation”という独自の言辞をヘンリー6世からヨーク公リチャード向けに書き換えた。さらに当時マーチ伯であった後のエドワード 4 世に警告するようヨーク公に促している。ハーディングの第 1 版と第 2 版は、わずか数年のうちにハーディング自身が党派的に変節をしたことを示している。単にハーディングの変わり身の早さと解釈する研究もあるが、宮廷の内情を知り尽くしランカスター朝に見切りを付けるタイミングを逸せず、先見の明があったとむしろ前向きな解釈が妥当であることを明らかにした。

(3) ジョン・オブ・フォードンのスコットランド年代記の間接的影響

ハーディングは、ジョン・オブ・フォードンによる歴史書 *Chronica gentis Scotorum* を読んでいたと考えられている。フォードンは現在 Proto Fordun と呼ばれている作品を主に使用したと言われており、この Proto Fordun に加えて、エルレッドの *Vita S. Edwardis* を含む著作も利用したと考えられている。Proto Fordun の執筆者が書いた別の歴史書、おそらく Proto Fordun の下書きの一部が、*Gesta Annalia* として今日知られており、15 世紀には先述の *Chronica gentis Scotorum* とセットで流通していたことがわかっている。このスコットランドの年代記では、父系の祖はギリシャ国王の系図、そして母系の祖はアングロ・サクソン国王の系譜から神話の神ウォーデンにまで行き着く。ジェフリー・オブ・モンマスとは系統の異なるこうした歴史書がハーディングの目に触れ、イングランド国王の系図をさらに掘り下げる年代記の執筆動機に繋がったとしても不思議はないことを明らかにした。

[ハーディングの人物像]

(1) スコットランドと隣接するボーダー地域で生まれ育った兵士ハーディングは、イングランド北部の貴族、ノーサンバランドのパーシー家、後にアンフラヴィル家に仕えた。1417 年にヘンリー5世からスパイの使命を受けスコットランドに赴き、スコットランドの地図と(偽造)文書を携えて帰ってきたと、後年執筆した年代記の中で述べている。本研究では彼の若い頃の行動と年代記の内容、さらに偽造文書との整合性と矛盾について明らかにした。

(2) ハーディングが作成した文書(National Archive 所蔵)がほとんど偽造であることは、19 世紀のアーキピスト、フランシス・パルグレイヴが細かく検討した。結果、イングランドへの愛国心と反比例する形で、ハーディングはスコットランドがイングランドに臣従すべきだとの持論を補強する文書を多数作成させていたことは明白である。ただし例外がある。本研究では、スコットランド王位継承権を巡るエドワード 1 世時代の「大訴訟 (Great Cause)」の一部の文書については証拠が現存せず、ハーディングの主張の信憑性が完全に失われたとはいえないことを明らかにした。

(3) ヘンリー6世とエドワード4世双方に年代記とともに偽造文書を提出している点からみて、ハーディングは年代記で語っているイングランドよりの言説を補強する機密文書として偽造文書を提出したことは定説とされている。本研究では、ハーディングよりも約 1 世紀前に、アンフラヴィル家でも同種の偽造文書が作成されていたことを確認し、文書のねつ造に対する罪悪感をハーディングはさほどなかったと推察できることを明らかにした。あるべき歴史の理想像に現実を合わせようとする使命感にハーディングが突き動かされていたと、明らかにした。

(4) 1437 年に主人のロバート・アンフラヴィルが死去するとハーディングは隠退して前述の年代記を執筆した。北方人としてスコットランド対策に人生の大半を費やしたハーディングは、スコットランド王位継承を巡る古くからの騒動に加担したパーシーやアンフラヴィルとその周辺から直接情報を得ることもできる立場にあったと推察されることを、本研究は明らかにした。リンカーンに隠遁したことも、取材のしやすさと関連があった可能性があることを明らかにした。

(5) ヘンリー6世に第 1 版を献呈したのは 1457 年とみられるが、当時ヘンリー6世は病状が安定せず国内情勢は不穏な状態に置かれている。ハーディング自身がその献辞の中で憂えているとおりだ。まもなく、ヨーク公リチャードがウェイクフィールドで戦死、その子エドワードが 1461 年には国王に即位した。カドワラダ譚の後ろにある“Lamentation”の記述がヨーク家よりに変更されている点からみて 1457 年から 1460 年 12 月 31 日にヨーク公リチャードが敗死するまでの間にハーディングが年代記の書き直しをしたと思われることに加えて、“Lamentation”にはハーディングにより特別な思いが込められていることを明らかにした。

[年代記相互の影響関係]

(1) エドワード懺悔王の記述 (*Chronica gentis Scotorum* ハーディングの年代記)

ハーディングはスコットランドの年代記からの影響を受けていたと思われる。ヨーク朝の党派に有利な女系の王位継承権について主張する際にもイングランド側にとって不利なアングロ・サクソンの系図については強調しない方針を採用したと思われる。*Chronica gentis Scotorum* を参考にしつつ上記のことを明らかにした。

(2) ハーディングの年代記“Lamentation”の影響 (ハーディングの年代記 *Prose Brut* または『イングランド年代記』マロリー『アーサー王の死』)

ハーディングの第 2 版の“Lamentation”はヨーク党派にかなりの影響を与えたと思われる。それが波及して『イングランド年代記』の印刷用原稿に影響を与え、カドワラダ譚が挿入されることになった可能性を明らかにした。さらにカドワラダ譚がジェフリー・オブ・モンマスの枠組み

を採用した中世最後の大型ロマンス、サー・トマス・マロリーの『アーサー王の死』出版の際にも利用され、ヨーク朝からチューダー朝への重要な橋渡しをした可能性も明らかにした。

<引用文献>

張替涼子「ハーディングの『年代記』とスコットランドの歴史の関係 家系図と王権の主張を中心に」『東京理科大学紀要』53（2021年），1-15.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Masako Takagi	4. 巻 39
2. 論文標題 John Hardyng and his Documents: Possible Link to Antony Bek	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Kyorin University Journal	6. 最初と最後の頁 89-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 張替涼子	4. 巻 53
2. 論文標題 ハーディングの『年代記』とスコットランドの歴史の関係—家系図と王権の主張を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京理科大学紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高木眞佐子	4. 巻 0
2. 論文標題 『ジョン・ハーディングの年代記』の諸相	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2020年度 極東証券寄附講座 文献学の世界 書物に描き出された時／時の中の書物	6. 最初と最後の頁 43 - 57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 張替涼子	4. 巻 52
2. 論文標題 ジョン・ハーディングとスコットランド問題 - 『年代記』におけるスコットランドの歴史書の使用について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京理科大学紀要（教養篇）	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木眞佐子	4. 巻 31
2. 論文標題 キャクストンとブルージュ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 杏林大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 11-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高木眞佐子	4. 巻 14
2. 論文標題 ジョン・ハーディング、年代記作家であり贋作者	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 書物学	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 張替涼子	4. 巻 51
2. 論文標題 The Mar Lodge Translatorによる『スコットランド国民の歴史』Book 1の翻訳について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京理科大学紀要(教養篇)	6. 最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計7件(うち招待講演 3件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Ryoko Harikae
2. 発表標題 John Hardyng's Use of Scottish Materials in His Chronicle
3. 学会等名 16th International Conference on Medieval and Renaissance Scottish Literature and Language (University of Alabama) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高木眞佐子
2. 発表標題 『ジョン・ハーディングの年代記』について
3. 学会等名 2020年度 慶應義塾大学文学部 極東証券寄附講座 文献学の世界（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masako Takagi
2. 発表標題 William Caxton and two Exemplars: The Chronicles of England and Nova Rhetorica at Caxton's Print Shop
3. 学会等名 Bibliographical Society (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masako Takagi
2. 発表標題 John Hardyng's Spying Mission and his Historical Writings: Possible Link to Antony Bek
3. 学会等名 Early Book Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木眞佐子
2. 発表標題 John Hardyng, a Spy and a Forger もうひとつの真実
3. 学会等名 日本英文学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masako Takagi
2. 発表標題 The Reception and Development of Malory Scholarship in Japan
3. 学会等名 King Arthur's Afterlife: The Reception of the Arthurian Legend, Faculty of Humanities, Musashi University
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masako Takagi
2. 発表標題 William Caxton and Two Exemplars: The Chronicles of England and Nova Rhetorica
3. 学会等名 The Bibliographical Society (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Masako Takagi	4. 発行年 2019年
2. 出版社 D.S. Brewer	5. 総ページ数 344
3. 書名 A New Companion to Malory	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	張替 涼子 (Harikae Ryoko) (70778175)	東京理科大学・理学部第一部教養学科・准教授 (32660)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------